

特集ワイド

東日本震災の被災地で、巨大防潮堤建設計画が進んでいる。高いコンクリート壁で海を覆えば、海辺の生態系を壊し、津波からの避難が遅れるとの指摘がある。防潮堤問題に揺れる被災地を歩き、失われゆく潮騒を聞いた。

【浦松丈二、写真も】

△計画防潮高さ TP+9・8m 高さはこちらまで▽
宮城県気仙沼市の大谷海岸に電信柱のような看板があった。荒れ地の中に青い海だけが広がる。TPとは「東京湾平均海面」だ。つまり、東京湾を基準に高さ9・8mの防潮堤がここに建つのだ。間近に見ると高さに圧倒される。この高さの壁がどこまでも続く……想像したらその重苦しさにめまいがした。9km南の海岸にはなんと14・7mの防潮堤が計画されている。

気仙沼市民有志の「防潮堤を勉強する会」の発起人、酒造会社社長の菅原昭彦さん(50)が説明する。「防潮堤は2011年9月に宮城県の震災復興計画として最初に示されました。震災から半年しかたっており、これで確定と

巨大防潮堤 被災地に続々計画

は誰も思わなかった。県と市は昨年7月から説明会を始めたが内容は当初のまま。しかも防潮堤の位置や形状は話し合えるけれど、高さは変えられないという。あまりに唐突、強引だった。

住民は昨年8月から専門家を招いて「勉強する会」を計13回開き、毎回100人以上が参加した。だがあえて賛成反対を言わなかった。「私たち住民は復興の予算とスピードを人質に取られているようなもの。文句を言うことで復興全体が遅れることがあっては困るから」と説明する。

同じ被災地でも地域によっ

て実情は異なる。「工場や産業エリアなら防潮堤が高くてもいいが、海辺の景観で商売をしている所は問題になる。ワカメや昆布などの資源のある地域では生態系への影響が懸念される。でも、防潮堤計画には背後地の利用計画がセットにされていて、復興を進めようとしたら計画をのまざるをえないのです」

話の途中、菅原さんの携帯電話に友人からメールが入った。防潮堤各地でどんどん決まっていますね。いいんですか。このままですか。とあった。年度末が迫り、県は合意形成を急ぐ。菅原さんは「県の担当者が『隣の人は合意した』と戸別訪問したことがあり、強く抗議しました。そんなやり方では、地域の信頼関係が壊れてしまう」と懸念する。

多くの地域で防潮堤計画はなし崩し的に進んでいる。石巻市雄勝町立浜の銀サケ・ホタテ養殖業、未永陽市さん(55)は「管理者の県が示した高さだから」と不本意ながら受け入れる意向だ。防潮堤は高さ6・3mと震災前に比べ約3m高くなる。

「地震発生後は防潮堤の上で海を見ていた。湾内にじわりじわりと海水が上がってきた。後ずさりしながら見守っていたが、防潮堤を越えたら早かった。やばいと思って、一気に裏山まで走った。海が見えていたから避難できた」。全49戸160人の集落ごと流されたものの、死者は5人にとどまった。これまで津波を経験してきた住民たちは、地震直後に裏山にほぼ全員が避難したからだ。だが、海が見

えないまま津波がいきなり防潮堤を越えてきたら……。大津波で、未永さんは自宅だけでなく、養殖していた銀サケ12万匹とホタテ35万個を失った。船に同乗し、再開した銀サケ養殖の工サヤりに同行させてもらった。風がどうこうと音をたて、潮騒を聞くところが寒さで耳がちぎれそう。この海と生きる、という未永さんの強い意志を感じる。しかし、巨大防潮堤はそこにも影を落とす。

未永さんは、自宅跡地に水産加工工場の建設を計画している。今後はサケの加工もして、ブランド化を目指すしかないと考えているからだ。だが防潮堤が高くなれば、自宅跡地横の小川の土手もかさ上げしなければならぬ。地続きの自宅跡地のかさ上げも必要になる。「待っていたらいつに

本音は「反対」だが……

口閉ざす住民

「防潮堤は被災地だけの問題ではない。国土強靱化を掲げる政権下では、日本全体がコンクリート壁に囲まれてしまう恐れがある」と警鐘を鳴らすのは、気仙沼市のNPO法人「森は海の恋人」副理事長の畠山信さん(34)だ。

畠山さんの地元、同市西舞根地区は住民要望で防潮堤計画を撤回させた。畠山さんら

は「堤防ができれば海と山が分断されて取り返しがつかなくなる」と計画が固まる前の段階で、集落に残る全戸(34戸)の意見をとりまとめ、市側を動かした。「人口や組織の多い市街地で合意を形成するのは大変。私の地域は長者がいて、その下に役員がいてという古い集落だから決まりやすかった」と語る。

同地区では津波で全52戸中44戸が流され、地盤は約80cm沈んだ。「沈下でできた干潟にアサリが増え、絶滅危惧種のニホンウナギが生息している。野鳥が来て、子どもたちの遊び場になっている。この干潟は地域で守っていくことにしています」。これも合意形成の成果だ。

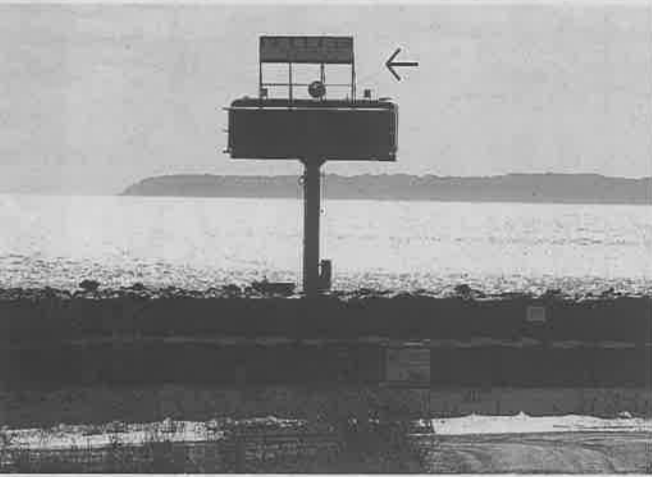
「環境省や宮城県は『森・里・川・海のつながり』を重視すると言っていたのに、現場は逆行している。災害に備えるために必要なのは、管理費のかかる防潮堤というハードではなくて自然の見方というソフト。津波なら前兆のとらえ方です。これは自然体験からしか学べない。でもそこに予算はついていない」

自民党は今国会に「国土強靱化基本法案」を議員立法で提出する方針だ。防災の柱として「強靱な社会基盤の整備」を盛り込んでおり、巨大防潮堤の整備を後押ししようだ。

畠山さんらを招いて公益財団法人「日本自然保護協会」が3日に東京都内で開いたシンポジウムでは、専門家から「海辺を利用してきた沿岸部住民で本音で賛成している人はいないだろう」「(住民が声を上げられない以上)外から声を上げるしかないのでは」などの意見が出た。同協会は4日、慎重な防潮堤復旧を求める意見書を安倍晋三首相らに提出した。

海と陸の境目にコンクリートの巨大な壁を打ち立てて、本音にふさわしい再生するか。何かゆがんだ発想がこの国を覆おうとしていないか。

宮城県気仙沼市の大谷海岸に立つ、建設予定の巨大防潮堤の高さを示す看板。9.8m(矢印部分)が、防潮堤の高さになる



身を切るような冷たい風のなか、養殖する銀サケにエサをやる未永陽市さん。宮城県石巻市の雄勝湾で

復興が「人質」に

なるか分からない。さっさと自己資金で工場を建ててしまおうか」と迷う。

雄勝地区の人口は1565人(昨年12月)と震災前の3分の1だ。未永さんは14世紀から続く24代目網元。「先祖が代々頑張って何とかつないできてくれた。それを考えると……」と意欲的だが、その前に防潮堤が立ちほだかる。

「巨大防潮堤は被災地だけの問題ではない。国土強靱化を掲げる政権下では、日本全体がコンクリート壁に囲まれてしまう恐れがある」と警鐘を鳴らすのは、気仙沼市のNPO法人「森は海の恋人」副理事長の畠山信さん(34)だ。

畠山さんの地元、同市西舞根地区は住民要望で防潮堤計画を撤回させた。畠山さんら

「巨大防潮堤は被災地だけの問題ではない。国土強靱化を掲げる政権下では、日本全体がコンクリート壁に囲まれてしまう恐れがある」と警鐘を鳴らすのは、気仙沼市のNPO法人「森は海の恋人」副理事長の畠山信さん(34)だ。

畠山さんの地元、同市西舞根地区は住民要望で防潮堤計画を撤回させた。畠山さんら

は「堤防ができれば海と山が分断されて取り返しがつかなくなる」と計画が固まる前の段階で、集落に残る全戸(34戸)の意見をとりまとめ、市側を動かした。「人口や組織の多い市街地で合意を形成するのは大変。私の地域は長者がいて、その下に役員がいてという古い集落だから決まりやすかった」と語る。

同地区では津波で全52戸中44戸が流され、地盤は約80cm沈んだ。「沈下でできた干潟にアサリが増え、絶滅危惧種のニホンウナギが生息している。野鳥が来て、子どもたちの遊び場になっている。この干潟は地域で守っていくことにしています」。これも合意形成の成果だ。

「環境省や宮城県は『森・里・川・海のつながり』を重視すると言っていたのに、現場は逆行している。災害に備えるために必要なのは、管理費のかかる防潮堤というハードではなくて自然の見方というソフト。津波なら前兆のとらえ方です。これは自然体験からしか学べない。でもそこに予算はついていない」

自民党は今国会に「国土強靱化基本法案」を議員立法で提出する方針だ。防災の柱として「強靱な社会基盤の整備」を盛り込んでおり、巨大防潮堤の整備を後押ししようだ。

畠山さんらを招いて公益財団法人「日本自然保護協会」が3日に東京都内で開いたシンポジウムでは、専門家から「海辺を利用してきた沿岸部住民で本音で賛成している人はいないだろう」「(住民が声を上げられない以上)外から声を上げるしかないのでは」などの意見が出た。同協会は4日、慎重な防潮堤復旧を求める意見書を安倍晋三首相らに提出した。

海と陸の境目にコンクリートの巨大な壁を打ち立てて、本音にふさわしい再生するか。何かゆがんだ発想がこの国を覆おうとしていないか。